

第1回豊田作業部会(わいわいサミット)議事録

開催日時: 令和8年7月10日 18時～19時30分

開催場所: 豊田公民館 集会室

参加者

グル	A	B	C	D
参加	6名	6名	6名	8名

- 地域福祉計画および地域福祉活動計画の策定:
事務局より、中津市における「わいわいサミット」の開催目的として、地域福祉計画と地域福祉活動計画の2つの計画策定が説明された。
- 地域福祉計画は行政による施策目標を定めた法的な計画であり、地域福祉活動計画は住民やボランティア、社会福祉協議会などが主体となり、市内15の地区ごとに具体的な目標や行動を決定する実践的な計画であると説明。これらは、高齢化や希薄化した地域関係により孤立する住民の問題に対処し、誰もが安心して暮らせる地域社会を構築するために今年度10月頃までの完了を目指して話し合いが持たれる。
- グループワークの趣旨説明と自己紹介:
事務局より、作業部会の進め方として、参加者が居住地域の自慢や個人的な体験を共有する形式が提案され、正解や間違いのない自由な意見交換が推奨された。参加者はテーブルごとに自己紹介を行い、地域への愛着や自慢できる点について語った。
- 参加者からは、台風などの自然災害に対する強さや自然環境の豊かさ、生活利便性のバランスの良さについて言及があった。また、スーパー等の生活利便施設、唐揚げなどの名物、地域祭事、ボランティア活動、過去の遺跡や歴史など、多様な魅力が語られた。
- グループワーク①
参加者が住んでいる地域で「いいな」と思うものや場所について、「花」をモチーフにした付箋に書き出す作業を促した。参加者は個々人で2分間思考を巡らせ、各自の思いや誇りに思う点を書き出した。
- 参加者は個々人で書き出したカードをグループ内で共有し、模造紙に貼り付ける作業を行った。この過程で、他者の意見を聞きながら新たな気づきを得たり、自身のカードを追加したりして、グループ全体で地域の魅力を可視化した。
- 他グループとの共有:
事務局の促しにより、各参加者は他グループが提示した意見を閲覧し、自身の考えに追加や修正を加える時間が設けられた。他の地区で行われている特色ある活動などが共有され、地域資源についての新たな気づきが促された。

- スーパーや病院が近くにあること、消防署による安心感、美しい自然景観、住民の明るい人柄、町内会の団結力などを挙げた。
- グループワーク②:
「現時点での地域の良いところ」の確認に続き、グループワーク②では「これからの地域」を考えることを説明した。グループワーク②のテーマとして「自身が住みたい、住んで良かったと思える地域とはどのような地域か」を提示した。参加者は、現在の地域の改善点や理想の姿について話し合い、そのアイデアをオレンジ色のリング型の付箋に書き出す作業を行った。
- 住みたい地域をイメージする作業が行われ、移動販売車の導入、歩行中の休憩所となるベンチの設置、高齢者が迷った際に助けを求めるSOSシステムの整備などの具体的なアイデアを提案した。
- 参加者は、近隣に住む住民の構成について、高齢者や単身者だけでなく、外国人住民、身体・精神障害を持つ人々、学生、子育て世帯などが挙げられ、様々な背景を持つ住民が共生している現状が確認された。
- ワークショップの次の工程として、先ほどのオレンジ色のお付箋には、自分自身の理想像が書かれていましたが、今回は先ほど挙げた多様な住民に取って「長く暮らしていきたい」「住みやすい」と感じる地域とはどのようなものか、イメージを膨らませて記入する作業を行った。
- 参加者は、多様な住民が安心して過ごせる地域づくりについて議論し、困った際に利用できる明確な相談窓口やSOSを発信できる拠点の重要性を強調しました。特に、外国人や障害を持つ人にとっても利用しやすい窓口の必要性が議論されました。また、物理的な移動の利便性（エレベーターの利用など）や、水路掃除などの地域活動において、住民同士がサポートし合える環境が望ましいという意見があった。
- 近隣に子供たちが遊べる公園が不足しているという課題を挙げ、広場等をコミュニティスペースとして再活用するアイデアや、移動スーパー、移動本屋、移動魚屋などを導入し住民の利便性を高める案が出された。また、地域住民が自然と集まれるような、日陰やベンチのある休憩場所の整備も重要視された。
- 高齢者や外国人居住者がサロンへアクセスしやすい環境整備の必要性や、商店街における駐車場不足の解消が提案された。また、外国人が祭りに参加しやすい地域づくりや、まちの美化活動、昼間の商店街の活性化という意見が出た。
- 市役所や病院などの主要施設は揃っているものの、将来的に車の免許を返納した後の移動手段が最も大きな懸念事項であると指摘した。また、地域の困りごとを助け合う「住民110番」のような仕組みの必要性に言及し、道に迷った高齢者などの見守りや相談の重要性を説いた。また、聴覚障害者との円滑なコミュニケーションのため、地域全体で手話などを学び、理解を深める取り組みへの支援を提案した。

- 地域住民が交流できる場所の必要性や、高校周辺における自転車走行の危険性を指摘し、自転車専用道路の整備や地域の安全対策を望む意見が出た。
- 事務局は、今回の作業の終了を宣言し、今後は掲示された「こんな地域にしたい」という目標を実現するために、具体的に必要な取り組みや行動について議論していく方針を示した。